



戦争中の「疎開」って、どんな暮らしだったの

空襲をのがれて、集団でいなかに疎開

今から55年ぐらい前の日本は、アメリカなどの連合国と戦争をしていました。

昭和19(1944)年ごろには、日本の上空を守る制空権は奪われ、日本各地では、毎日、アメリカ軍の爆撃機による空襲がくり返され、工場や住宅などはめっちゃめっちゃにこわされたり、焼かれたりしました。

そこで、都会の子どもたちは、親元をはなれて、爆撃のおそれのないいなかに疎開することになったのです。疎開は学校ごとに集団で行われ、お寺などを寮として借り、引率の先生と子どもたち(小学3年生から6年生)が共同生活をしました。

ひもじく、苦しかった疎開生活

戦争は激しくなる一方で、生活に必要なものは手に入らなくなりました。特に、食べるものが極端に少なくなり、疎開先で、子どもたちは、おなかをすかせて、ひもじい思いをしました。

朝食は、おわん一杯の「おかゆ」です。このおかゆの中には、お米が20~30つぶくらい泳いでいるようなひどいものでした。昼食は、毎日、弁当箱5分の1ぐらいのご飯に、梅干しが一個入っているだけの「日の丸弁当」です。子どもたちは、梅干しの種をいつまでもしゃぶり、最後には種をかみくだき、中身を食べました。夕食は、ジャガイモなどのものです。イモのつるも食べました。あまりのひもじさに、道ばたの雑草を食べて、おなかをこわしてしまう子どももいました。

このように、集団疎開は、両親からはなれて暮らすさびしさや、満腹に食べられない苦しさが続く、とてもつらいものだったのです。(監修・田代 脩)

